

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 25 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520305

研究課題名(和文) 英語教育材料としての英文学の可能性を探る研究

研究課題名(英文) How to use literature written in English for Japanese learners of English

研究代表者

小野 章 (ONO, Akira)

広島大学・教育学研究科(研究院)・准教授

研究者番号：20283228

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：英語教材として文学が使用されることは、今日の日本においては稀である。しかし、文学には言語使用の最高の形態(の少なくともひとつ)が表現されているのではなかろうか。このような現状および信念から、本研究では、中等・高等教育の英語教育に文学を活用する方策を探った。具体的な研究成果としては、主に次の4点が明らかになった。

(1) 大学の教育学部における文学の在り方 (2) 高校段階で、文学によって育まれることが期待される英語力 (3) 高校もしくは大学における英語文学教材の具体例 (4) 文学を用いて自主学習を促すための工夫

研究成果の概要(英文)：Literature written in English has seldom been used in Japan as teaching materials. This situation might be deplorable from a viewpoint that regards literary language as one of the best linguistic forms. This study has tried to identify effective ways in which literature can be used in the EFL (English as a Foreign Language) context. The following are the four main findings of the study:

(1) the ways in which literature could be dealt with in a faculty of education (2) English abilities to be developed through literature in a senior high school (3) examples of literary works as English teaching materials (4) a way in which literature could be used for fostering self-learning

研究分野：英語教育内容学

キーワード：英語教育 英語文学 文学によって育まれる英語力 フォーカス・オン・フォーム 自主学習 英語文学教材 高等教育における英語文学 中等教育における英語文学

1. 研究開始当初の背景

日本における昨今の英語コミュニケーション能力重視の中で、文学は英語教育にほとんど使用されていないという背景があった。

2. 研究の目的

上記「背景」を踏まえ、本研究では、言語の最高形態(の少なくともひとつ)である文学を英語教育に活用する方策を探ることとした。より具体的には、以下4点を研究目的に設定した。

(1) 文学の扱い方が分からないという高校英語教員の現状を鑑み、大学の教育学部における英語文学関連科目の在り方を探ること。

(2) 高校段階で、英語文学によって特に教育効果が上がると思われる英語コミュニケーション能力を同定すること。

(3) 英語文学を使用した教材例を提示すること。

(4) 自主学習を促すための教授法を考案すること。

3. 研究の方法

上記4点の「目的」ごとに、以下(1)~(4)に研究方法をまとめる。

(1) 大学の教育カリキュラムの中にいかに英語文学関連科目を位置付けるかを、研究代表者が勤務する大学が採用している到達目標型教育プログラムを例に探った。

(2) 文学による教育効果が特に期待される英語能力があるのではないかという問題意識から、高等学校学習指導要領および、より一般的なコミュニケーション能力論において、英語コミュニケーション能力がどのように規定されているかを探り、文学との関連性を考察した。

(3) 文学が英語教育に使用されない理由のひとつに英語や内容の難解さが挙げられる。この問題を解決するために、リーダビリティや発問に配慮した教材を開発することとした。

(4) 自主学習が重視されているという現状を踏まえ、ペアワークやグループワークを通じ、学習者自らが学びをどう変容させるか、文学作品の原文と、それを平易な英語に書き換えた文章の読み比べが学習者の読みにいかなる影響を与えるかの2点について、量的・質的な分析を試みた。

4. 研究成果

(1) 上記「研究の目的」と「研究の方法」のそれぞれ(1)について次の研究成果が得られた。

研究代表者が所属する広島大学は、独自の

学部教育システムとして「到達目標型教育プログラム」を平成18年度から採用している。同プログラムを構築する過程で、中高の英語教員養成のための教科専門科目として文学をいかに位置づけるかを、教育学部に所属する英語教員全員が議論した。結果、中高の英語教員になるために求められる15の能力中、英語文学関連の授業は5つの能力に関わることが確認された。これら5つの能力のひとつである「中等英語教育の教育内容に関する基本的な知識」に本研究では特に焦点を当てながら、同能力育成に英語文学関連科目がいかに関わり得るかを考察した。具体的には、「文学の英語の特質を知ること」や「文学読解に適した発問の在り方を知ること」等が、中高の英語教員には求められることが示唆された。

「文学を扱いたい、扱い方がわからない」という中高英語教員の声を耳にする。そのような声に応えるひとつの方法として、大学の教員養成課程における英語文学関連科目の在り方を本研究では考察した。本研究成果は、日本教育大学協会が発行する論文集にも掲載されており(下記〔雑誌論文〕参照)、国内においてはある程度発信されていると考える。今後は、他の教員養成機関とも連携を図りつつ、教科専門科目の在り方をより明確にしていく必要がある。

(2) 上記「研究の目的」と「研究の方法」のそれぞれ(2)について次の研究成果が得られた。

リーディング能力に関し、例えばBrown(1994)は14の下位能力を設定している。これらの能力中、文学読解によってのみ育まれるものは存在しない。換言すれば、リーディング能力を育む上で、文学を扱う必要はないということになる。しかし、本研究では、他教材でも育まれるが、文学教材によってこそ効果的に育まれる能力があると考えた。高等学校学習指導要領および、より一般的なコミュニケーション能力論を分析した結果、「字義どおりの意味と暗示された意味との違いに気付く」や「内容を伝える表現そのものに着目する」等の7つの能力は、文学による効果的な育成が期待されることが分かった(研究成果の詳細は下記〔雑誌論文〕参照)。

今後の展開として、本研究で挙げた7つのコミュニケーション能力が文学によって効果的に育まれることを実証的に示す予定である。

(3) 上記「研究の目的」と「研究の方法」のそれぞれ(3)に対する研究成果として、英語文学に基づいた教材(本文もしくは発問)を3点開発した。

本文は、高等学校英語教科書に実際に掲載されているHemingwayの“A Day’s Wait”をそのまま使用した。教科書には、同作品の原文のほかには、簡単な紹介文と、難しいと

思われるいくつかの表現に補足説明があるのみであり、発問は全く存在しない。発問は読みを確認すると同時に読みを促すものであるという考えから、本研究では字義理解に関わる8発問と、より深い読みを促す10発問の計18発問を開発した(下記〔雑誌論文〕参照)。

ある高等学校英語教科書にはサピア=ウォーフ仮説(使用言語がわれわれの思考を決定するとする説)に基づいたレッスンがある。このレッスンに対応するものとして、ルイス・キャロルの『鏡の国のアリス』から、ハンプティ・ダンプティが登場する一場面を原文のまま教材化することを提案した。この場面でハンプティ・ダンプティはサピア=ウォーフ仮説を見事に逆転させた(「鏡」に映したごとくに)持論を展開している。本文の提示に加えて本研究では学習者の読みを補助すべき発問も12開発した(下記〔雑誌論文〕参照)。

本文は、高等学校英語教科書に実際に掲載されているOscar Wildeの“The Selfish Giant”をそのまま使用した。教科書には、同作品の原文に加えて発問も掲載されている。しかし、その発問は意味内容に関するものばかりであり、言語形式(表現そのもの)には全く焦点を当てていない。第二言語(外国語)を習得する際には、言語形式にも注意を払うことが効果的であるとされていることから、本研究では言語形式が焦点化されることを狙った発問(例:「(ある)情景を目の当たりにした巨人は改心します。その改心は・・・“melted”と表現されています。この語が含み持つ意味を考えなさい)を開発した(下記〔雑誌論文〕参照)。

以上～の研究の今後の展望は、上記の研究成果(2)とも関連させながら、開発した教材本文と発問が学習者のコミュニケーション能力向上に寄与することを実証的に示すことである。

(4)上記「研究の目的」と「研究の方法」のそれぞれ(4)について次の研究成果が得られた。

下記〔雑誌論文〕では、研究課題「学習者は文体論の知見を用いた文学テキストの発問に、ペアワーク・クラス全体での話し合いを通してその読みをどのように変容させているか」を設定した。自由記述による調査結果から、学習者一人での読み比べて、ペアワークやクラス全体での読みの方が文体論的発問に対してより活発に反応することがわかった。

〔雑誌論文〕での研究では、ペアワーク・クラス全体での話し合いを通じて、学習者が主体的に考える姿勢が確認された。ただし、発問そのものは学習者が考案したものではなかった。自らが問いを発しながら文学を読むための仕掛けとして、下記〔雑誌論文〕では、原文とリトルド版(原文を平易な

英語に書き換えたもの)を読み比べることを課題として設定した。結果、リトルド版の英語が原文の英語に対する意識を高めたことが確認された。

英語教育における文学の活用意義を唱えつつも、それを実証的に示す研究は不足している。そのような現状にあって、研究成果(4)は文学の効用を量的・質的に示そうとするものである。一方で、研究成果(4)からは、学習者がどうしても気づかない(しかし、教える側としては気づいて欲しい)点がいくつかあることも判明した。学習者の自主性を尊重しながら、これらの点をいかに教授するかも今後考える必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 8件)

小野 章、文学テキストの原文とそのリトルド版の比較に基づいたフォーカス・オン・フォーム、英語英文学研究、査読有、59巻、2015、35 - 51、
http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/files/public/36810/20150325135827865942/HiroshimaStud-EngLitEngLit_59_35.pdf

今村 有希、小野 章、文学テキストを用いた英文読解—文体論に基づいた発問とペアワークを活用して—、中国地区英語教育学会研究紀要、査読有、44号、2014、21 - 30、
http://ci.nii.ac.jp/els/110009857594.pdf?id=ART0010374049&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1432530802&cp=

小野 章、物語文読解においてフォーカス・オン・フォームを実践するための発問作り、広島外国語教育研究、査読有、17号、2014、39 - 55、
http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/files/public/35477/201410162053192392/h-gaikokugokenkyu_17_39.pdf

小野 章、文学を通して育成される英語リーディング力とは—新高等学校学習指導要領とコミュニケーション能力論を踏まえて—、広島外国語教育研究、査読有、16号、2013、147 - 58、
http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/files/public/34505/20141016202546943591/h-gaikokugokenkyu_16_147.pdf

小野 章、到達目標型教育プログラム導入による教科専門科目の変革—英語文学関連科目の場合—、日本教育大学協会研究年報、査読有、30集、2012、15 - 25、
https://ndlopac.ndl.go.jp/F/?func=find-c&ccl_term=001%20%3D%20023642162&adjacent=N&x

=0&y=0&con_lng=jpn&pds_handle=&pds_handle=

小野 章、石原 知英、『鏡の国のアリス』を用いた英語教材の開発、学校教育実践学研究、査読無、18巻、2012、99 - 104、
http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/files/public/32594/20141016190914152190/HiroshimaJSchEduc_18_99.pdf

小野 章、武久 加奈、石原 知英、英語文学を教材として読むための発問 Hemingway 作 “A Day’s Wait” を用いて、広島外国語教育研究、査読有、15号、2012、197 - 211、
http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/files/public/32305/20141016185758551385/h-gaikokugokenkyu_15_197.pdf

〔学会発表〕(計 4件)

宇山 公暁、小野 章、速読と精読を取り入れたリーディングの在り方 Oscar Wilde “THE SELFISH GIANT” を教材として、中国四国教育学会、平成 25 年 11 月 2 日、高知工科大学(高知県・香美市)

今村 有希、小野 章、文学を用いた英語教育—ペアワークによる読解の変容に着目して—、中国地区英語教育学会、平成 25 年 6 月 22 日、山口大学(山口県・山口市)

小野 章、文学教材によってこそ育まれるリーディング能力って何だろう?、日本英文学会中国四国支部、平成 24 年 10 月 28 日、高知大学(高知県・高知市)

小野 章、到達目標型教育プログラム導入による教科専門科目の変革—英語文学関連科目の場合—、日本英文学会中国四国支部、平成 23 年 10 月 29 日、島根大学(島根県・松江市)

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

取得状況(計 0件)

〔その他〕

ホームページ等
特になし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小野 章(ONO, Akira)
広島大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号: 20283228